

オリックス生命保険、ITモダナイゼーションで「2025年の崖」を克服

ここ14年で保有契約数を10倍に伸ばしている生命保険会社がある。1991年設立のオリックス生命保険だ。2000年半ばに法人向け商品中心から個人向け商品へと軸足を移し、2006年に医療保険「CURE(キュア)」を発売して弾みをつけた。

企業の成長に伴い、システムも拡張してきたが、同社のアプリケーション開発部門の責任者である本間信介氏は「デリバリー最優先で開発してきた結果、個別最適化が進んでしまっていたのです」と語る。同様の課題を抱える企業は多いはずだ。

2012年、同社は個別最適から全体最適へと舵を切ることとを決断する。分散していたシステムを再構築してサーバー基盤を共通化し、機能を共有化することでITインフラをサービス/プラットフォームに変えていくという中長期のビジョンを打ち出した。目指す姿は、ビジネスの変化に柔軟に対応し経済的にもメリットが大きい「ソフトウェア・デファインド・データセンター」である。

同社がまず取り組んだのはサーバー基盤の集約だ。「仮想化技術を使って3つのデータセンターに分散していたサーバー基盤をハイパーコンバインドインフラに統合しました」と本間氏。同社はこの取り組みで、公益社団法人企業情報化協会(IT協会)の「平成29年度IT賞特別賞(IT推進部門賞)」を受賞している。

次のターゲットは機能の共有化だが、課題となるのは老朽化し手作業中心のオペレーションで運用されている既存アプリケーションの存在だ。そこで同社はアプリケーションプラットフォームのモダナイゼーションに挑む。DockerとKubernetesを使って既存のアプリケーションを自社でコンテナ化し、イン

フラコストの30%削減など一定の成果を上げた。

しかし、同時に今後の課題も見えてきた。技術面の学習コストの高さと、バージョンアップサイクルの短いKubernetesへの対応である。この課題を解決するために同社はどのような選択を行ったのだろうか。

コンテナ化の課題を解決する 企業向け統合プラットフォームの活用

同社がモダナイゼーションに取り組んだのは、2018年8月にサーバー基盤を更改した、Webで保険商品の申し込みを受け付ける「WEB申込完結システム」だ。オペレーションを高める「DevOps」、スピードアップとスキルやナレッジ蓄積のための「内製化」、OSSであってもよいものは積極的に採用する「チャレンジ」の3つをスローガンに取り組んだ。

「Kubernetesにより、コンテナの適切な配置や、コンテナの自動構築で環境の複製が容易になり、開発環境の多面化、世代管理も容易に実現することができました。さらにビルドとデプロイの自動化で作業効率を向上させ、ヒューマンエラーも削減できました」と本間氏はその成果を語る。

これによりインフラコストは30%削減され、デプロイの所要時間は6分の1に短縮された。障害発生時の原因特定も外部に開発を委託したシステムよりも明らかに速くなった。しかし、同時に課題も浮上してきた。

「プロジェクト後に見えてきた課題は、技術面の学習コストが高いことと、Kubernetesのバージョンアップサイクルが短いことです。プロジェクトに関わったメンバー以外にスキルが広がらないため、一部のメンバーにタスクが集中し、バージョンアップの追従が大きな負担になっています」(本間氏)。

今回のプロジェクトは、30ある主要な既存システムの1つに過ぎない。浮上してきた課題の解決策を見いださなければ、残りのアプリケーションのモダナイゼーションに踏み切ることは難しい。

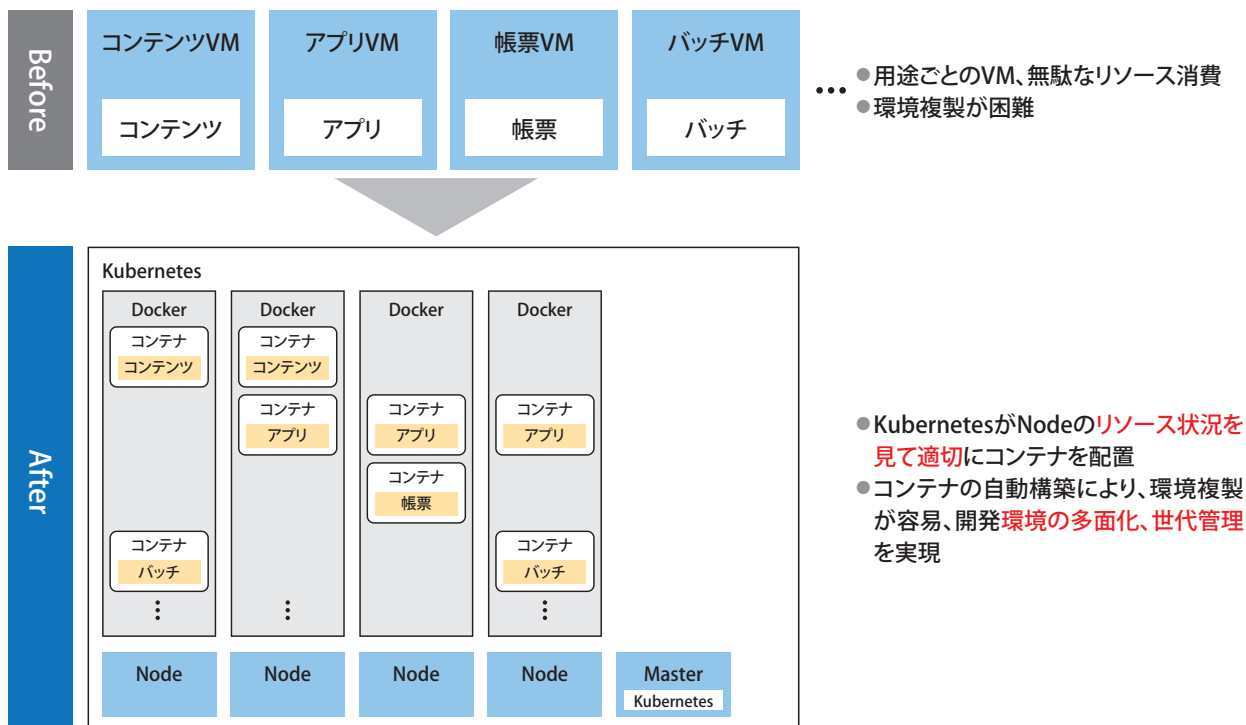
「課題解決のアプローチとして考えていたのは、コンテナの企業向け統合プラットフォームの活用です。それを調べていたとき、私たちのニーズに合致するものが発表されました。それが、IBM Cloud Pak for Applicationsです」と本間氏は語る。



オリックス生命保険株式会社
ITアプリケーション開発部長
本間 信介 氏

■ 図1：モダナイゼーションプロジェクトで実現したこと

Docker / Kubernetesによるコンテナオーケストレーションの実現



DXを実現するために必要なモダナイゼーション

「IBM Cloud Pak for Applications」は、今年8月に発表された「IBM Cloud Paks」の5つの製品の1つである。IBM Cloud Pak for Applicationsは、IBMが買収したRed Hatのコンテナ・プラットフォーム「Red Hat OpenShift」と連動し、コンテナで稼働するエンタープライズ・アプリケーションを企業レベルでデプロイして容易に管理できるようになる。

本間氏は「もともとOSとの相性からRed Hat OpenShiftに注目していましたが、ミドルウェアをはじめとするIBMの総合力にも魅力を感じていました。迷っていたところに今回の発表があり『これだ!』と思いました。さっそく検証することになりました」と現状を話す。

IBM Cloud Paksは、企業の既存アプリケーションやシステムのモダナイゼーションを支援するもので、コンテナ化されたIBMミドルウェアとオープン・ソース・コンポーネントから構成され、そこにログ管理やモニタリング、Kubernetes運用基盤などRed Hat OpenShiftによるコンテナ・プラットフォーム運用サービスが加わる。

日本IBMの上野亜紀子氏は「テクノロジーでビジネスをつくっていくデジタルトランスフォーメーション(DX)の時代では、優れたテクノロジーを常に採用していくことが必要です。

『2025年の崖』に直面する日本企業にとっては、既存システムをモダナイゼーションすることが大きな課題になっています」と日本企業の現状を指摘する。

それに応えるものとして登場したのが、IBM Cloud Paksである。そこにはモダナイゼーションのあらゆるニーズに対応できる機能が用意されている。

あらゆるタイプのモダナイゼーションに対応

最初に提供が開始された5つのIBM Cloud Paksの中には、アプリケーションのビルド、デプロイ、実行のためのIBM



日本アイ・ビー・エム株式会社
クラウド&コグニティブ・ソフトウェア
事業本部
ハイブリッドクラウド・ソフトウェア
第1テクニカルセールス 部長
上野 亜紀子 氏

■ 図2：IBM Cloud Paks – ユースケースに応じて事前統合済み

最初に発表された5つのIBM Cloud Pak



Cloud Pak for Applicationsをはじめ、データの収集・編成・解析を行う製品、アプリケーションとデータとクラウドサービスを統合しAPIとして公開する製品、ビジネスプロセスを自動化する製品、マルチクラウドの可視化とカバナンスを自動化する製品がラインアップされている。

すべてのベースとなっている技術はコンテナとKubernetesであり、IBMはRed Hat OpenShift上で稼働することを保証している。上野氏は「IBMはここ3年でミドルウェアの機能を部品化し、Kubernetes上で動くマイクロサービスのものへと変えてきました。今回、これらの機能をユースケースに合わせてエンタープライズ・グレードで使えるように再編したのがIBM Cloud Paksです」と話す。

注目すべきは「モダナイゼーション＝クラウド化ではない」

(上野氏)としている点だ。アプリケーションがコンテナ化されることは、オンプレでもクラウドでもプラットフォームを選ぶことなく稼働することを意味する。「新旧のアプリケーションが共存でき、あらゆる形のモダナイゼーションを選択できます」と上野氏は語る

当然、オリックス生命保険が取り組む段階的な進め方にも対応できる。本間氏は「最新の技術を取り込むことは投資対効果の観点からもメリットがあります。モダナイゼーションによって、1つずつ技術的負債を解消して企業価値を高める技術的自己資本に変えていきます」と意気込みを語る。

IBM Cloud Paksの登場でモダナイゼーションが加速することは間違いない。そのメリットをいち早く享受することは、企業としての競争力の強化につながっていくだろう。

関連サイト

— IBM Cloud Paks —

<http://ibm.biz/cloudpak-jp>

— 「年間最大12兆円の経済損失～2025年の崖」を越える、“DX”実現基盤 —

<http://ibm.biz/appm-jp>

— IBMアプリ・モダナイゼーション・カタログ —

<http://ibm.biz/appm-catalog>